

肥後國熊本御領、四月朔日津波上り、流家溺死夥敷事、是者熊本問屋より、大坂七軒問屋へ書付差越候よし、凡五万人程の流失と申沙汰にて、右書付未見不申候、

寛政四年壬子四月

〔筆のすさび〕一普賢嶽燒出 寛政四年亥歲肥前雲仙岳の傍、普賢嶽火もえて、太谷は僅のうちに山となる。終に城に及ばんことをおそれ、人民其難をさげんとするうち、四月一日泥水湧き出でて、過半漂没す、三郷はあともなくなり、其外小き山いくつも出来たり、たまく、逃れ生きたる人も、其ときのことをおぼえず、あるひは湯の中をはしり遁れたるやうに、覺えたるもあり、また水中泥中、また火中を遁れたるやうに、覺えたるもありとなり、其禍淺間に十倍す、地の没したるは、肥後の方かへりて多かりしといふ、

又寛政の初、長崎の南の海中に、一里許のうち、潮一方へながれて、瀬をなし、處あり、彼方へ通ふ船人、數年あやしみ語りしが、後に雲泉嶽の變あり、山裂け崩れ、潮出で、邑里あまた蕩壞して、隔岸の肥後海濱まで漂盡す、此夜逃れ走りて、死をまぬかれし人、熱湯の中を走ることくなりしといひし、崩壞せしは前山とて、雲泉の前なる山なり、はじめ火の燃え出でし時は、近傍の人こゝかしこに逃れ避けしが、數月なにごともなき故、漸々立ち歸り、後は酒肴などもてのぼりて、遊覽せし人もありしとなり、

肥後國
阿蘇山

〔和漢三才圖會五十六〕阿蘇山あそさん 壽安鎮國山じゆあんちんこくさん 在肥後

大明一統志云、日本國阿蘇山、石火起接天、俗異而禱之、有如意寶珠、大如雞卵、色青夜有光、大明成宗帝永樂初年封爲壽安鎮國山、

按、阿蘇山之祭神、詳于肥後國名所、豐後大利豊後肥後之 笹倉二里 坂奈志二里 坊住坊住則阿蘇宮寺 絕頂光煙、青黃赤之三色、而見於方三里、二里下

坊七自七此七里七餘七、一本堂、長十八間 横六間 上宮、中宮、下宮、有七十

社、二絕頂光煙、青黃赤之三色、而見於方三里、二里下